

学校英文法を超えて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内田, 恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010267

学校英文法を超えて

Beyond School Grammar

内 田 恵

Megumi UCHIDA

（平成 28 年 10 月 3 日受理）

0. はじめに

英語を読む，書く，聞く，話すこと四技能についてバランスよく学習することが唄われて久しい。しかし，時代の流れにそってどこに重点を置くかは変化してきており，昨今は「読み書き」よりも「話す・聞く」へという流れが定着してきたようである。この方針に従い，中学校や高等学校は言うまでもなく，大学でも実用英語関係の授業を必修化して学生の会話力や運用能力強化に努めてきた。その結果，確かに英語を使った物おじしない対応は身につけてきたように思われる。

しかし，このような方向は「瞬間英会話可能人間」を増やすことに成果を上げた反面，「思考活動に直結する英語使用訓練」からは徐々に距離を置くものになっている。おおげさに言えば人間の知的好奇心育成は後ろに廻されつつある。ではどうしたらよいか。われわれは二方向型の英語の指導を提案する。一つは実用，もう一つは非実用である。後者はすぐに否定されがちだが，現代の英語教育の流れを見つめながら，前者の実用型教育にくさびを打ち込む程度でよいのである。その重要な手段が「英文法」である。

次の英文を比較してみよう。いずれも「窓をあげること」を要求している文である。

- (1) a. (Please) open the window.
- b. May I open the window?
- c. I wonder if I could open the window.

同じていねい表現 (polite expression) であっても，ことばは使用される環境でどういう表現を使うかが左右される。(1a) から (1c) へいくに従って，ていねい度は増してくる。私たちが自然に習得した日本語では，無意識のうちにどういう表現を選択することが適しているかの判断が成されている。しかし，外国語としての習得ではそこまで到達するのに努力と時間が必要となる。

もう一つ注目することは，「母語の習得と外国語の習得はそもそも別のものである」という現実である。母語習得の代表的な研究である「生成文法理論」では，「人間には生得的に生活環境で使用される言語を自然に習得する機能が備わっていて，その機能は5歳ぐらいまでに最も活性化する」という報告がある。このような知見から見えてくることは，中学校以上のレベルでは母語と同じように無意識的な言語習得は望めないという帰結である。そこで中学校一歩手前である小学校高学年で何か手立てがないかが模索された。勉強という硬さからは少々解放された形の「外国語活動」の導入である。あえて「外国語を教える」ことを意識しながらも，

何とか並行して「外国語で教える」こともやっていけないかという試みである。

ところが「外国語を教える」と「外国語で教える」ことを並列して境目のないものにしたのだが、簡単ではない。なぜならば前者を無視または軽視して後者は成り立たないからである。「道具（言語の規則）を知らずして製品（文化の知識）を完成することはできない」のである。

別のことばで言うと、「わかる」と「慣れる」を同時に両立するにはどうしたらよいか。筆者は「英文法」という玉手箱を開けて、「ことばを操る」という宝物を今風にアレンジすることが効果的であると考えている。こういう英文法は「読む」、「書く」という技術に関係するだけという発想は当たらない。聞いたり、話したりするためにも必要であることを理解してほしい。ではそのための文法とは何か。学校文法における聞く、話すことの利用法とは何か。

本稿では、中学校の教科書から発せられた指導上の質問点を基本に、生徒に対する答え方や教え方の背景について考えていく。これらの質問は素朴であるがかなり高度な理論背景に迫るようなものもあり、興味深い。1節では、比較構文に焦点を絞り、配列、意味、使い方という観点からその分析と教え方を論じる。そこでは、学校文法の重要性を主張すると同時に、現代の言語研究を理論面から支えている側面からの研究を紹介する。さらに、中学校の教科書の構文について、言語運用面から深く掘り下げてみる。2節では、日英語の時制体系の相違が原因で起こる日本語の「～している」表現の英語表現とその教え方を論じる。そして3節では、中学校初級で習得する接続詞 *and*, *or* と否定との関係について考える。特に否定辞 (*no* または *not*) の作用域について議論したい。最後に4節では、言語習得と英文法指導の関連性を考察してみる。

1. 学校文法の広がりや深まり（比較構文を題材にして）

「二つ以上のものについて一定の尺度の基で特性を比べる」ことを「比較」と定義してみよう。英語では両者が同等であれば「*as…as*」を使うことになり、優劣がある場合には比較級という表現が使われ、さらに一つだけが抜きんでている場合には最上級が用いられる。このような厳格な表現形式の違いは、日本語には見られないので、英語学習には困難を伴う項目と言われている。そこで教科書の例を利用しながら、比較構文の全体像について眺めていくことにする。以下で行う議論は、観察・記述を中心に生成文法研究で用いる「統語」、「意味」、「語用」という細分化を念頭に進めていく。

1.1. 比較構文の構造（省略の文法）

まず中学生の学習する (2) の例で文末は *me*, *I*, *I am* のどれが適切であるかに焦点を当ててみる。

(2) He is older than {*me* / ?*I* / *I am*} .

目的格が後続する *than* や *as* の特徴については次の二種類の方向性があると言われる。

1) *than* や *as* は接続詞であり、元は文の主格だったものが、**部分省略**という過程を経て、何らかの影響で目的格に変わってしまった。

2) *than* や *as* は前置詞であり、(代)名詞は主格であれ目的格であれ、単独で後続する。

1) の考え方に立つと、(3) は元々 *as* の次に文があることになり、[]内の語句が重複するので省略されたと推測できる。

(3) I'm as young as you [are young].

この現象を深く探るためには、議論の道具立てになる「省略」の原理をまず確認する。この操作を行うのには、「もし省略しても、そこにどんな要素があったかを容易に想定できること」(復元可能性)という制限がある。(4)に示す簡単な例で具体的に調べてみよう。

(4) School lunches are better than box lunches. (Book 3, p. 104)

(4)においてはbox lunches(弁当)が一種の複合名詞になっていて、boxだけにすると単独の名詞として解釈されかねないので、後半のlunchesを省略せずに残している。

興味深いことに、一般動詞が使われる文で代名詞が同形の場合に、主格か目的格かの判断が曖昧になることがある。次の(5a)では元の文を明確に復元できないのに省略をしてしまったから、「あなたが愛する (you love her)」の意味の他に「あなたを愛する (he loves you)」という解釈も可能である。

(5) a. He loves her more than you.

b. He loves her more than you do. (綿貫他(2000), p. 360改)

1)の分析に立てば、(5a)のthan以下に省略があり、代動詞doを補うことで、(5b)のように文の意味が明確になると主張できる。

ところがasやthanに続く語句は、そもそも単独の(代)名詞であり、文の省略ではないとする2)の分析のほうが説明しやすい現象がある。

(6) a. Jim is taller than ■. (■は(代)名詞があったことを示す)

b. Who is Jim taller than?

生成文法ではwho / which / whatで始まる疑問文(5b)は、①尋ねたい(代)名詞の部分((5a)の■)をwh語に変換し、②文頭にそれを移動してできあがると考えるので、than以下が文ではなくて(代)名詞であるという主張を支持することになる。

than / asの後に続く要素に関して、Swanをはじめとする学校文法書は、「形式張った文体では主格または「主格+動詞」が使われ、口語ではmeなどの目的格代名詞が主格の代用をすることがある。(2)参照」という記述している。これを比較構文の指導を意識して書き換えると次のようになる。

(7) a. 主格の場合は後ろの動詞が省略されているものだが、動詞が省略されない場合も多い。

b. ただし主格のみが現れる時は目的格に変換している用法(例えばI → me)が現代は定着しつつある。cf. Me and my friends are an easygoing lot. (私と私の仲間はのんきな連中だ。), It's me. (私です。), Me too. (私も同様だ。)

これらは英語の時代的変遷過程で、口語において使用頻度が拡大し、新たな用法として定着したためと推察できるので、比較構文における目的格使用もこのようなところにルーツがあるのかもしれない。前述のthan / asを含めた上述した1)と2)のどちらの提案に関連しても、この主張は矛盾することはないように思われる。

1.2. 比較構文の意味(相対 vs. 絶対)

中学校における指導では、(8)から(10)の構文の意味解釈に徐々に慣れさせることが重要となる。

(8) Maya can run as fast as Taku. (Book 2, p.104)

(9) Serengeti is larger than Minami-Kanto. (Book 2, p.96)

(10) Mt. Fuji is the highest mountain in Japan. (Book 2, p. 98)

ところで、(8) から (10) は、表面的な意味としてそれぞれ fast (速い), larger (より大きい), highest (最も高い) という基準の優劣を表現しているが、使用される状況で二種類の微妙な解釈が可能になる場合がある。例えば (8) において Maya と Taku は両者とも「速く走ることができる」ことを前提にしての比較に加えて、単に「2人の速度が同じくらい」という内容を示していて、俊足かどうかは問題ではないという意味も存在する。同様なことが (9) の面積比較についても言えるが、(10) は Mt. Fuji が日本最高峰であることは周知されていて、「高い山」という前提が最初から存在しているので、(8) や (9) に見られる意味の特徴は現れない。これはたいていの比較構文には**相対比較**の概念が含まれていて、構文の意味は使われる状況に依存される割合が強いということから導かれる。

他方、比較には**絶対比較**を示す場合もあり、比較対象が表面に出ないため than 以下の要素はない。また比較級、最上級は名詞を修飾する位置に配置される。

(11) Do you have smaller ones? (Book 3, p. 33)

(12) We need to use less energy. (Book 3, p. 49)

(13) She wanted to make the world a better place. (Book 3, p. 73)

比較級が修飾している対象が (11) では代用表現の one で特定のではない。また、(12) と (13) は energy, place という漠然とした量や空間を表す語であることから、smaller, less, better という比較級にこめられる「程度」の基準は、標準よりも上か下かということを強調しているにすぎない。したがって、「何かと何かを比較する」ということを表現する意図は稀薄になる。

1.3. 語用から見た比較表現の文意 (日本語訳と比較構文)

1.2節で概観した比較構文は、ある意味で「話し手と聞き手の前提の一致」が生じて初めて成立する解釈と言える。本節では構文の字面の意味から読める意味の拡張について探っていこう。

(14) a. It (=Angel Falls) is almost 1,000 meters high.

b. It is three times higher than Tokyo Tower! (a-b, Book 2, p. 99 改)

(14) は数字を含む比較級構文である。'almost 1000 meters' という具体的な高さが (14a) で示されているが、高さについては想像しにくいことがある。そこで「エンジェルの滝は高い位置から流れ落ちている」ということを前提とし、加えて (14b) では聞き手に対して (高層の電波塔として有名な) 東京タワーを引き合いに出すことで「高さ」の具体的なイメージと「高いという驚き」を伝えようとする表現と言える。次の (15) は同等比較の例である。

(15) It's 31.5 meters tall. It's as tall as a ten-story apartment building. (Book 3, p. 13)

これも10階建てという高いアパートを想像することで、より具体的に法隆寺の高さを認識してもらうことを意図している。

ところで (14b) に対して、「東京タワーの3倍の高さです」と表現することは、「高い滝である」ことを伝える説明訳としては何ら問題がない。実際に、比較級倍数表現であっても同等比較文のような日本語訳は英和辞典にも見られる。聞き手に対して「高いというイメージをより鮮明かつ具体的に伝達する」という目的を優先されるからであろうと推測できる。

さらに、日本語訳にひと工夫すべき比較級構文を見ておこう。

(16) He had more than seven books.

(17) It is more than ten minutes' walk.

(16) において more than seven は「7を除いてそれ以上」というのが厳密な訳であり、具体的には8冊、9冊、10冊…を指すが、一般的には「7冊以上」と訳す。また通例は、「たくさんの本を抱えている」という描写を表現している場合が多く、(7を含むかどうかという) 数字にまつわる厳密な中身はあまり問題にならない。同様なことが (17) にもあてはまり、実際には「10分かそれ以上」というニュアンスが示されているのであって、「10分間きっかりは含まないことを意図する」などという解釈を伝達する必要はない。まさに状況に合わせた生きた英語の分析を踏まえた日本語訳でよいと言える。

最後に、使うべき比較表現と会話の状況の関係について (18) のような対話を例に考えてみよう。

(18) Yuki: Can you run faster than Ben?

Tom: Oh, yes. I can run as fast as Koji.

Yuki: Then, who can run the *fastest, you or Koji?*

Tom: I think Koji runs the fastest in our class.

「比較」に関係する背景を解説すると、このスキットには3名の人間が登場する。もしも2名ならば比較級を使う構文のみで処理ができるが、3名以上となると最上級構文も話し手が使用する候補に入ることを、聞き手も容易に想定できる。そこで二つ目の Yuki の発話を観察してみよう。the fastest という最上級を用いているのにもかかわらず、文末では、*you or Koji* という2人を対象とする語句で結んでいる。一見2名の人間の走る力量を比較しているように見えるが、スキットの状況からして最低 Koji, Ben, Tom (= you) の3名を比較した上での答えを要求していることがわかる。このことはすでに話し手も聞き手も了解している事項であるので who can run the fastest, you or Koji? という疑問文が使われることになる。

このように、学校文法の中で教える文法規則からはやや逸脱するような表現がコミュニケーションでは使われることがある。ただし、正式な言い回しをおろそかにするという方向ではないことも留意したい。生きたことばの指導には、まず原則をしっかりと教えて、その次に現実の使用状況には幅があることを知らせることが大切である。

2. 日英語時制の視覚的な教え方 (「～している」表現の日英比較)

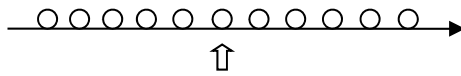
本稿では、日本語を介在させる英語の教え方を肯定する立場で論を進めているが、そもそも言語体系が異なる二言語を比較対応させるときに、対応関係のミスマッチが生じることがあることは指導上意識していなければならない。「英文の内容を汲み取って、適切な日本語に変換する作業」について1.2節と1.3節で分析したが、2節では、英語と日本語におけるそもそもの時制体系の隔たりから、理解する過程で工夫を必要とする「表現の対応関係」について考察する。

2.1. 「～している (います)」表現の多様性

日本語の「～している (います)」に対応する英語表現は一意的には決定することはできず、その候補として現在形、進行形、完了形があげられる。これらの例文とイメージ図を示してみよう (介は基準時を示す)。

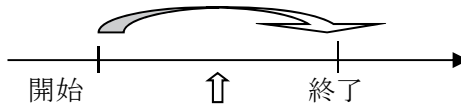
(19) I practice judo every Saturday. (Book 2, p.12) (私は毎土曜日に柔道の練習をしている.)

(19)' <現在形 (連続した行為) >



(20) I'm playing soccer. (Book 1, p.94) (私は今サッカーをしている.)

(20)' <現在進行形 (行為自体を強調) >

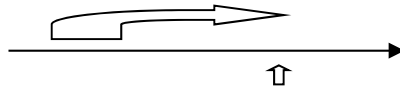


(21) I have lived in this city since I was ten years old. (Book 3, p.34)

(私は10才の時からこの町に住んでいる.)

(21)' <現在完了形 (過去から現在までの行為の継続) >

非特定の時



(19) の現在形は**習慣的な行為**を表し、alwaysや every などの副詞と用いられる。これに対して (20) の現在進行形は、時間軸の中の**幅を持った定点**を捉えてその様子を表現している。さらに (21) の現在完了形は、現在を基準時として、その時点までの**継続状態**を表している。このように、扱っている時制や形態が異なるにもかかわらず、日本語では「～している (います)」表現に統一されるため、英文の内容理解が難しくなることがある。

この理由として、1) 日本語の時制が英語ほど厳密に区分されていないので、英語の時制ごとに一対一で対応する日本語表現が存在しないこと、2) 日本語の「～している」表現の特徴の1つに、例えば「バスが止ま**っている**」のように、バスが止まったという結果後に生じた状態 (結果状態) に言及する用法があること (久野・高見 2013)、などがあげられる。さら、英語では進行形あるいは完了形に用いることができるか否かが動詞ごとに決定していて、正しい構文を作る時に反映される。そこで2.2節では英語の動詞についての分類を概観してみよう。

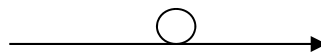
2.2. 意味特性による動詞の分類

標準的な英語動詞の分類を (22) にあけて、イメージ図をそれぞれに添えてみる。

(22) 動詞の分類

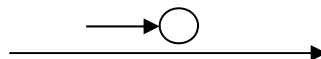
a. 到達動詞 (achievement verb)

一瞬のうちに終了して達成される動作・行為を表す。arrive, find, reach, break, open, shut, etc.



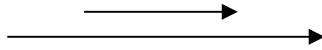
b. 達成動詞 (accomplishment verb)

一定の時間後、終点に到達する動作・行為を表す。carry, paint, read, write, etc.



c. 行為動詞 (activity verb)

行為者の意図により中断・中止することはできるが、動詞そのものの意味には終結がなく、続けようと思えば永遠に続けられる動作・行為を表す。listen, play, run, shop, shout, etc.



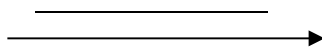
d. 状態動詞 (state verb)

主語の意思で終わらせることのできない状態を表す。精神状態・感情、伝達および引き起こされた感情、存在や所属を表す。

<精神状態・感情> believe, know, like, remember, understand, want, wish, etc.

<伝達・喚起された感情> agree, amaze, mean, etc.

<存在・所属> belong, live, possess, etc.



[図中で、下段の矢印は時間の流れ、○は動作・行為の終了(完了)、上段の矢印は動作・行為の時間的経過と終了、直線のみは終わりが無いことを表す。]

2.3. 進行形か完了形かの迷い

次に2.2節で見た四種類の動詞群と進行形および完了形との相性をまとめてみる。

(23)

		到達	達成	行為	状態
進行		×	○	○	×
完了	継続	×	×	○	○
	完了・結果	○	○	×	×
	経験	○	○	○	×

(23) の一覧表を比較参照しながら、四種類の動詞と進行形および完了形との関連性について、英語指導の際に混乱を招きやすい項目を中心に、さらなる説明と補足をしてみる。

まず**到達動詞**は「瞬間的に終わる動作や行為」を表すので、通例は(24)のように途中の経過を表す進行形といっしょに用いることはできない。

(24) a. *The door is opening.

b. *The train is arriving at the station.

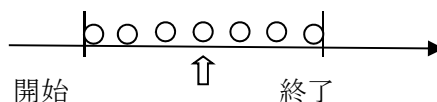
しかしopenが反復的動作を述べている(25a)や、主語が複数でarriveがいくつもの列車の到着を表している(25b)の場合には、進行形を用いることが可能であり、(25)'のように図示される。

(25) a. The door is repeatedly opening.

(そのドアは繰り返し開いたり閉まったりしている。)

b. The trains are arriving. (列車が次々と到着している。)

(25)'



また**達成動詞**と**行為動詞**は分類そのものに共通点があり、両者は比較的自由に進行形の中に見れる。特に write や paint などの達成動詞が「継続」の意味を表すには、現在完了進行形を用いることが多くなる。

(26) I have been writing letters all afternoon. (私は午後ずっと手紙を書き続けている.)

加えて、**状態動詞**にはそもそも「～している」という基本的意味を含んでいるために、進行形にする必要がない。

「～している」という表現を英語に翻訳指導する時には生徒にまず使われる場面を想定させた上で、英語動詞の特性と、英語と日本語の時制体系の相違をヒントに、教師が平易に解説しながら解説していくことが大切になる。

3. 観察力養成の方法（等位接続詞の思わぬ用法）

中学校の英語教科書の英文には、基本語句の気になるあるいは問題になるような英文が時々見られる。例外扱いで通過するのも一方法だが、立ち止まってあれやこれやと推理することは思考力、観察力を養成するのに好都合の題材になることがある。次の例を見てみよう。

(27) There were no desks, no chairs and no boards. (Book 2, p. 125)

(27) で and を or に変えることはできないのだろうかという質問が実際にあった。and, but, or は英語を勉強してすぐに学習する等位接続詞である。3節では and と or の一歩進んだ用法比較をすることによって、否定語との関連性を眺める。

3.1. and と or の基本文法

一般的な and と or の用法の中から本節の説明に関連しそうな項目を中心に整理してみよう。

(28) a. and

- ① 語と語、句と句、節と節を結ぶ。
- ② 時間的な順序・結果・因果関係を示す。

b. or

- ① 「A かあるいはB」の意味を表す。
- ② 否定語の後で、「A でもBでもない」の意味を表す。

日本語では、or に対応する「A または B」という訳語からは「A と B のどちらか一方」という感覚がまず浮かんでくる。他方 and に対応する「A と B」という訳は、たいていは「A プラス B」という認識を持つ。しかしよく考えると「A と B が意味するところの内容や質を完全に含めなければいけないか、あるいは多少不十分でも許されるのか？」ということが問題になってくる。時々「A や B」という日本語が使われるのはこの微妙な内容の差を表現しているのかもしれない。

次に、and および or と否定語との関係を示してみよう。

(29) a. 「A かつ (and) B」の否定 = 「A でないかまたは B でない」

b. 「A または (or) B」の否定 = 「A でもないし B でもない」

客観性を重んじる論理（学）的見解によれば、(29a) は部分否定を含意していることになり、(29b) は全否定に通じる。否定語が and あるいは or と関係する場合の日常使う言語感覚からすると一見奇妙な現象に見える。

そこで否定語 not と no の特徴をまとめてみよう。通例 not は左右両隣どちらかの動詞句や節を、

noは後続の名詞句を否定する。この原則に関連して「否定語がどこ(まで)の語句(または節)を否定するか」という作用域(scope)について興味深い例を見ておこう。

(30) a. No news is good news.

b. No news is not good news. (久野・高見(2007) p.3)

(30a)は「便りのないのはよい便り(ことわざ)」という意味だが、(30b)のように文中にnotを入れると「便りのないのはよい知らせではない」という意味になる。すなわち、noはnewsを、notは文全体を否定している。no→notの順番で並んでいるが、作用域の関係はno<notということになる。ただし(27)のように同一の否定語noだけが複数現れている場合は、noの作用域がそれぞれの語句ごとの狭いものである。

3.2. andとorの使い分け

ここまでandとorについて論理的否定、および否定の作用域について概観してきたが、実際の使用では必ずしも数式のようにはいかないようである。否定にまつわる関連語句などを参考に、ふるまいを分析してみよう。

まずnoのような否定語が複数あってもorを使う例がないかを調べてみる。すると関連語句neither～nor…構文が浮かぶ。

(30) We can neither use the train nor ride in cars. (Book 3, p.98)

(私たちは列車を使うこともできないし、車に乗ることもできない。)

norは元々‘not or’であると考え、neitherの作用域はuse the trainまでということになり、orの前に否定語の存在が窺える。ただし英語の歴史の変遷(英語史)に関する研究ではneither～or…という言い方が昔は存在していたという説もある。

次に単文を使って、and, orと否定語の関係を分類比較してみよう。

(31) a. He did not have enough time and money.

b. He had no time and money.

c. He had no time and no money.

d. He had no time or money.

(31a)は「時間もお金も両方ともに充分にない」、(31b)は「時間とお金という(関連性の強い)1ユニットが、ごちゃまぜになって不足している」ということに、また(31c)は、「時間もお金も両方とも(全く)ない」ということを強調している。これに対して(31d)は「時間とお金のどちらかは充足しているが、片方がない」というニュアンスが漂いがちであるが、実際はnoの作用域が文末まで及んでいると考えられて(31c)と同じ意味となる。

さらにandやorを用いて複数の名詞句を列挙するような肯定文、‘A, B, C, D and E’と‘A, B, C, D or E’という言い方に注目してみる。前者にはA, B, C, D, Eのすべてが並行的に揃っている[充足している]場合と五つの候補を羅列しただけで、それらの一部でも揃っていれば[充足していれば]よいという想定も可能になる。これに対してorを使う後者は一義的に五つの候補の中から一つまたはそれ以上という選択を含意しており、一部のみが充足するandの場合の解釈と指し示すものが同一になる場合もあると思われる。

3.3. 文脈と否定

3.1節および3.2節までの観察結果を駆使して、いよいよ(27)にあげた文について分析して

みよう。結論から先に言うと、((32)として再掲した)(27)の言い方はこのままで正しく、さらに(33)のように言い換えてもほぼ同じ意味を表す。

(32) There were no desks, no chairs and no boards.

(33) There were no desks, chairs or boards.

すなわち(32)と(33)を比較すると、否定語noが1つだけ現れる場合はorを使うが、それぞれの語にnoを付ける場合はandが使用されると結論づけられる。同様な例も見よう。

(34) We don't use spoons or forks. (Book 3, p.40)

(私たちはスプーンやフォークは使わない.)

(35) We cannot go to theaters, movies or any other kinds of entertainment. (Book 3, p.98)

(私たちは、劇場や映画、そのほかのどんな種類の娯楽にも出かけることができない.)

まさに(28b)の②の意味に匹敵して、否定語notの作用域がorの後の語句にまで及び、並列した部分をすべて否定していることになる。

さらに(32)は(リストを列挙するタイプの)there構文であり、(新情報と旧情報による)情報構造から分析すると、新情報の好む文末に近い位置に、「机、椅子、黒板」という語をたたみかけるように配置して、一つ一つの語に否定語noを添えることで、orを用いた(33)の用法よりも、はるかに強い否定の気持ちを強調していると言えよう。

そもそも「AやB」という日本語表現は'both A and B'と'either A or B'の両方を含意しているので、その否定も二通りに分かれることが今回見た特徴の根幹となっているように見える。

4. 結び

本稿では、英語授業と英文法教育のかかわりについて、中学英語を題材に断片的に考察した。具体的には1節では比較構文、2節で時制における日英語比較、3節ではandとorにまつわる英文について、その分析と指導法を議論した。

「英語授業はすべて英語でやるのが理想」ということばをよく耳にする。しかし理想と現実を埋めるためには留意しておく大事な点がある。一つは、「英語のみでやる授業から、かえって理解力不足のために英語がわからなくなっていく生徒を多く作らないこと」、もう一つは、挨拶、ゲームなどの“楽しい英会話”だけが英語の本質ではなく、「英語という世界共通の言語ツールを利用して、グローバルな視点を持って考える力を養成することで初めて意味がある」ということを忘れないことである。言語はコミュニケーション手段であると同時に、思考手段でもある。先人たちが開発してきた古典的英語教育技術を全否定することは実に愚かである。

英文法というと、コミュニケーション能力育成にとって反対側の軸にあるものとみなす論も見受けられるが、言語理論研究からの成果を分析していけば、母語であろうと外国語であろうと言語習得には欠かせない分野であることは自明である。その研究成果の中で、実際の指導で「おやっと思われる英語事象をわかりやすく説明してさらなる高度な興味を持たせるための方法論を探る」ことは、生徒のみならず教える側にとっても有益であると思われる。中学校英語教科書の項目に絞って、さらなる文法項目に潜む「おもしろさ」の伝え方を開発されることが期待される。

* 本稿は「静岡県教育研究会英語教育研究部平成28年度夏季研究大会」における記念講演『ちょっとトクする英文法と指導法』(2016年8月5日：静岡県島田市)の発表原稿を基に加筆

修正をしたものである。講演の機会を与えていただいた同研究会に御礼申し上げます。

<例文引用教科書>

中学校検定教科書 英語 TOTAL ENGLISH 2012年度版 (Book 1~3) 学校図書出版。

<参考文献>

久野暲・高見健一 (2007) 『謎解きの英文法 否定』くろしお出版。

_____ (2013) 『謎解きの英文法 時の表現』くろしお出版。

Thomson, A.J. and A.V. Martinet (1986) *A Practical English Grammar*. Oxford Univ. Press.

内田恵・桑原陽一・新妻明子 (2011) 『ちょっとトクする英文法』静岡学術出版。

綿貫陽・宮川幸久他 (2000) 『ロイヤル英文法 改訂新版』旺文社。